
失われた愛、蘇る恋

異鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

失われた愛、蘇る恋

【Nコード】

N2907Q

【作者名】

異鳥

【あらすじ】

目が覚めるとそこは見知らぬ部屋で、何故か俺には記憶がなくて、俺の妻と名乗る女が介抱してくれていた。だが俺はこの女のことを思い出すことができない。俺は一体誰なんだ？ 自分が誰なのか。それを探しながら日々を過ごす白石泰輔、彼の記憶が戻った時止まった時間は動き出す。 記憶が織りなす儚い恋愛ミステリー。

第1章 一 1 君の思ひ出（前書き）

あの日言えなかった言葉は

いつか君に言える気がしたよ

子供の頃の記憶が手を引いて

君の大切さに気付かせてくれて

時間と共に消えたあの季節が

君の面影を焼き付けていて

風が町を駆ける度に

僕は君に歌うんだ

あの時言えなかった言葉は

いつか君に言える気がしたよ

鮮明に揺らぐ僕の記憶が

君への想いに気付かせてくれて

風が頬を撫でる度に

僕は君に歌うんだ

僕は君が好きなんだ

あの時言えなかった言葉は

今なら君に言える気がしたよ

第1章 一 君の思ひ出

縄張り争いでもしているのであろう犬たちの耳ざわりな声に俺は起こされた。

「うう・・・」

何故か痛む後頭部をおさえながら俺はのっそりと起き上がる。頭に手をあてると違和感がした。

どうやら包帯が巻いてあるようだ。

何故包帯が？そう思ったときあることに気付く。

「ここ・・・どこだ・・・？」

人間というのは単純なもので、想定外のことや自分の心で耐えきれないことは口にでてしまうのだ。

まあそれは年のせいかも知れないのだが。

かくにも頭に「混乱」の2文字しかない俺にも自分が見知らぬ部屋で寝ているということがかろうじて理解できた。

俺は混乱した頭で必死に何故こんな場所にいるか考える。
しかし

どれだけ思いだそうとしても、ここがどこなのか
自分が何故ここにいるのか

自分が何をしていたのか
そして

自分の名前が何というのかさえも思い出せない。

「なんだ・・・それ・・・。」

耐えきれなくなった心の声が口から漏れる。
さらに

「これが記憶喪失…か…」

また口から溢れる

ん？

記憶喪失？

俺が？

自分で言った言葉に我が耳を疑う。

やはり人間というのはどこまでいっても単純なもので、許容量以上のことが起こると頭で理解出来なくなる。

しかし、時間がたって自らの置かれている状況を理解したとき、悲しみや恐怖などの感情がまるで津波のようにおしよせてくるようになっていたのだ。

俺は今まさにその状況にあった。

全身に寒気がする。

きつと心の奥底から「恐怖」か何かが押しよせてきているんだ。そう感じた。

「落ち着け、落ち着け。」

俺はそう自分に言い聞かせ、無理に心を抑えようとする。

しかし、押し寄せる津波は止められるわけもなく、「恐怖」は俺の心をまるで蝕むかのように増殖していく。

息が荒くなる。

俺の心には限界が近づいていた。

心にリミットがあるのか、限界を超えるとどうなるのか俺には見当もつかなかったが、確かにわかるのは

俺の心は恐怖に押し潰されそうだということだった。

俺の心が折れそうになったとき、俺の正面にあったドアが開き、ミルクティーを持った一人の女性が現れた。

その女性は俺が起きたのを見るなり血相を変えて俺のもとへとかけ寄ってきた。

「起きた？」

「今までどこに行ってたの？」

「随分うなされてたようだけど大丈夫？」

「頭のケガは？痛くない？」

全く以て状況が理解できない。

質問攻めにあったことの前にまず質問の意味が理解できていない。

「何を言ってるんだこの人は……」

と思ったときにハッと気付く。

自分の中に先ほどまであんなに積もっていた恐怖が消えていたのだ。また俺の頭の中は混乱で埋め尽くされてしまったようだ。

依然として俺の頭がごちゃごちゃしてることに変わりはないのだが、

『彼女の存在』

それだけで俺の心は幾分救われたような気がした。

「あの……すみません……おっしゃっている意味がわからないんですが……」

やはり敬語を使うのはおかしかっただろうか。

彼女は「何故敬語を使うのだろう」顔をしている。

少し困惑ぎみの表情の彼女は

「あ、そうだよね、まだ起きて間もないし、頭もうってるんだからしょうがない。なら、ちょっと落ち着いてからにしようか。」

と言うが、

記憶喪失の人間に

しかも、こんな短時間の間に
情報を押し付けられれば、そう簡単に落ち着くことがでいるはずがない。

だから、俺はしばらく落ち着いたのを装うことにした。

俺は彼女から貰ったミルクティーを半分ほど飲み、

深々と深呼吸をした後、

ほんの少し落ち着いてから自分の名前がわからないことなどを彼女に全て話した。

もしかしたら彼女が俺を監禁しているのかもしれない。

最初はそう思った。

しかし、ミルクティーを受け取った時に彼女が見せた笑顔で

彼女は信用してもいいのではないか

そう思えたのだ。

それは

ミルクティーがおいしかった。

とかそんな理由ではなくて

彼女は俺のことを知っている。

ただ：本当にただそう思っただけなのである。

案の定、彼女は何かを知っているようで、俺が自分のことについて話していくにつれて

彼女の顔はどんどん絶望にも似つかないような表情になっていった。

「ホントに覚えてない？嘘でしただって言うなら今のうちだよ？」

彼女は俺が話している間にそう言ったが
何も覚えていないのに

「嘘でした」

などとは言えるはずがない。

俺が話し終わると

彼女は泣きそうになりながら

自分にも言い聞かせるようにして言った。

「よく聞いて。

あなたは白石泰輔、私は白石唯音ゆいねあなたの妻。

あなたは2年前、突然ここを出て行ってそれっきりだったの。

後頭部を強く打って記憶を無くしているようだけど、大丈夫。すぐに思い出すよ。心配ない。」

俺は一度に大量の情報を詰め込まれたため混乱した。

記憶喪失の人間には文字通り記憶がない。

自分のことさえわからない不安定な状態なのだから無理もないだろう。

だが、もし俺が泰輔という男だというのなら思い出すことが出来ていてもいいはずだ。

しかし、名前を言われても自分の名前さえも思い出すことができない。

ただ…

ベットにある写真立てを見ると、彼女の言ったことが間違いでないのがわかる。

そこには、俺と同じ顔をした男が今横にいる唯音という女性と楽しそうに写っている。

とはいえ、まだ俺は自分の名前さえ思い出せていない。

「すまないが思い出せない。」

俺がそう言う

彼女は右手の裾で涙を拭うしぐさを見せ

それから涙をこらえるためだろう、無理に笑って

「あなたは記憶を無くす前も正直で嘘は1つもつかなかったの。私はそこに惚れたのよ。」

「私は今から仕事に行くから、アルバムとかを見てゆっくり、ゆっくりでいいから昔のこと思い出して。」

と言った。

俺は彼女に申し訳ないなと思いながら、右手で持っていたミルクティーがちょうどいい温度になったのを確認して飲み干した。

彼女はそれから何も言葉を発する事なく

俺から白い無地のコップを受け取り、部屋を出ていった。

彼女が出ていった後

俺は自分の脳をフル活動させて、自分のことを思いだそうとしてみた。

ここまで自分のことを知っている人を悲しませてはいけない、と内なる俺が俺を駆り立てたのだ。

しかし無情にも思い出せることは何一つなく、ただ俺が落胆するだけの結果となった。

それから少し時間がたち

ボタン

扉が閉まる音がした。

おそらく唯音さんが仕事に出たのであろう。

一言も話さずに出て行ったのは俺が記憶をなくしていたのがあまりにショックだったのかもしれない。

まだ

俺の記憶が戻る気配はなかった。

第1章 一 2 君の思ひ出（前書き）

衝動挙げ一。・ω・）ノ

気に入らんとこは改正してくし

あの日言えなかった言葉は

いつか君に言える気がしたよ

子供の頃の記憶が手を引いて

君の大切さに気付かせてくれて

時間と共に消えたあの季節が

君の面影を焼き付けていて

風が町を駆ける度に

僕は君に歌うんだ

あの時言えなかった言葉は

いつか君に言える気がしたよ

鮮明に揺らぐ僕の記憶が

君への想いに気付かせてくれて

風が頬を撫でる度に

僕は君に歌うんだ

僕は君が好きなんだ

あの時言えなかった言葉は

今なら君に言える気がしたよ

第1章 一 2 君の思ひ出

玄関の扉を閉めると何故か涙がでてきた。

無意識のうちに。

おそらく泰輔の前で涙を堪えた分、今流れているのだろう。

泣きながら家の真ん前にある階段を使い4階の距離をおりる。

いつもは仕事のことを考えてしまうからだろうか短く感じる4階分の距離を

今は地球から太陽までの距離がこの階段にあるように感じた。

頭を空っぽにしたいと思う階段もその時は

泰輔が生きていてくれた。

帰ってきてくれた。

でも泰輔には記憶が無くて

自分のことさえ何も思い出せない。

私はどうすればいいんだろう。

もし泰輔が何も思い出せなかったら、

とかそんなことしか頭になくて、

嬉しさや悲しみ、不安、疑問とかいろんな感情が渦巻いていた。

そして私の身体が経験したこともない事態に無意識的に涙を流して

しまったという感じだった。

自分では仕事の脳に切り替えようと思っているのだが、涙が止まってくれない。

そうして階段を降りてきた私の涙は既に乾いていた。

その頃には嗚咽をはいてはいたものの、感情の整理はだいたいできた。

息を整えながら10メートル程離れた車へ向かう。

車に乗りエンジンをかけるときには頭の中には仕事のことしかなかった。

『人間とは至極単純な生き物だ』

そう言っていた、記憶がある時の泰輔を思い出しながら駐車場を出た。

いつもと変わらぬ風景の

いつもと変わらぬ道を

いつもときほど変わらぬスピードで走る。

私の通う会社は車で40分程かかる距離があり、私は2街も越えて

いかなければならない。

以前はもっと近い位置に会社があったのだが

「はまじま浜島社の業績が悪いんだ、悪いが君に行って利益を上げてきてもらう、その内こっちに帰ってこれるだろう。ま、頑張ってくれたまえ。」

との社長命令により、今は浜島社に勤めている。
まあ平たく言えば飛ばされたのだが。

「あんのくそオヤジめ。」

なんて言っても元の会社に戻れるわけもないし、ふかじま浜島社の方が都心にあった深島

社に比べて活気があってやりがいがあるというか、やっていて楽しいと思える。

そして何より部下が
仕事のスピードが遅いが、素直で熱意がある。

そんなことを考えている間に浜島社に着いた。

それほど広くはない駐車場に車を留め
会社に向かって歩きだす。

今日もいつもと変わらぬ日々が始まる、そう思うと憂鬱にはなるが

今日からは泰輔がいてくれる
そう思うと気分が和らぎ今日1日も頑張ろう、そう思うことができる。

気付けば鼻歌で『未来予想図』を歌っていた。

仕事一途な私が鼻歌を歌っているのが
それほど珍しかったのか
入口近くにある警備室の前にいる警備員のおじさんが唾然とした顔
でこちらを見ている。

少し恥ずかしい気もしたが
何しろ今日は気分がいい。

私は警備員のおじさんに軽くおじぎをし、エレベーターの横にある
階段をかけあがった。

もちろん鼻歌を歌いながら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2907q/>

失われた愛、蘇る恋

2011年10月8日14時50分発行